海恩條記

内閣文庫
和書 類
三五四六二 號
二九 冊
一七二 函
一〇 架
(五 冊)

内閣文庫
番號 和 35462
冊數 29 (5)
函號 162 300

共二十九

函144

日本政府図書

後愚昧記

應安元年

消息

内庫 乙部

国立公文書館
National Archives of Japan

慶安元戊子歳

誠以當寫筆にし處君命に依て或文庫ニ奉り

諸家最相見えてこゝにまては恥かしき外今極まり

不存知さてはいか様にけるやらん大方法之儀不叶

只不見知次第にてそこ／＼見揃候ハ最相

見ん不審懇円 閏月 見ん 車割四人にまて恥かしき合戦なり

ふるん哉けるやらん云申し為後記法定之了

松山文庫

此物之二通しなて此路ゝ手紙　うつとし

此方中將殿拜領之座之事を此方寄之には
しるし物此所へ金物にて返先に筆作
物見ハ唐之ハ南方其甲にる物ハ葉長
物見ハ二抱は見にて大字不得之文事
ありハとゝ申まても閑閑何あてとも太郎ハ
たて殿ハとゝ度々定て被之言請にける事也

而之て大閤之茂左々の外々而之て未経々付於
委細ハ之事也
了俊殿（頼元）息女也しかる所に懇志ある事に尽し悲之と又事し
て俊頼（ムツ丸）として之處も也大清法師得心附にて御に於
以下筆之御家老之時に於て御動座實　桂川僧都
道原情大原表紙之道河閣梨　次孫大河閣梨之十付（在之　候之）
之方生行讀之宗弼得之
番僧ある場代（中門之迄て）編し　傍僧（允元　僧出網）繼六經　洲取免狗

上卿権中納言兼光以宣旨件事傳説之大概
如此判法出給殿上人 宣旨 参詣者以篇四位
殿上人 親雅次 上内海篇々什之可深泉可為
王人 大 以行任下文とし沙汰す前條也
宣経
件次第亀親町前内府道し御参拝畫銑本漢
令之為也

押小路内府御書
此御札旨趣令之即下也可々文武僧
集候者懇意とす上記録並沙汰事御擬
見為申存知旨也下さし仰せ付申之年以
中御度御供奉也下総事可被成御年御祝
計会御海字申付方代供奉之後要以御擬
之鎮条御思定候下一 此文字一ツ書也 先々御沙汰之年紀如
年様大損御此目録御計付無御不書遣

一用意池ヲ不足揃巻表句編之候

一打紙ヲ以右筆書写細ニ見安ラ之候

一筆跡家々不同各別候

一若文料紙ヲ好ミ秋風之折紙等悉御座有

志候不及庶幾之

一此時世業不能ノ手跡用ニ不足ヲ秋雲濃華

志房同之墨之元武筆人式法下筆必不習筆跡

此外ニ先生偏以宿老賢為之不覚不猶有禅不残

存之処候ニ御時ニ不審甚ニ可存候

一長寛也以山陰寺ヨリ入道左府記一両巻之候

一布衾路次京衆華先例人々以為不用之

不及所之地掌家例尤可被用候也入道左

府之経井行路之内羊猶有之所致年号之條式人

和讒條柄々見之云之不可要事也不可説之候之

不住候之也不可見之也

一筆並親所并内府
御料紙者以下檀紙縣紙今年迄杉原ニ候
人々子且未定所存ニ候此外何様ニ付ても
為使者又誤書要ニ而也書置ニ一見之可
候て又精密ニても生儀用ゝ案文ニて候
一付ゝ御続紙用例候也或説能宜候も用意
但し上書ゝ中ゝ候ニ付而何様ニ候ハゝ文墨
一下状他年中様ニ而ゝ用之にてもしかるへし

一御状奉書一通前ゝ案内ニ御猶以而用也
許当ゝ事ゝ益ゝ付惟許之前ト
事も不之年ゝ所ゝ今ゝ事ゝ之右
猶也所ゝ一ゝ諸篇案ゝ所ゝ竹之御思ゝ
しる又へ無ゝ案之子細ゝ動所ゝ不ゝありけり

通用字　文車文字兄弟之事

可申候　通用ハ如何様ニも　雲形

右ノ車　庫　右ノ字常用之内ニ編ハ

此文四位以上ハ　右車ハ総而用之所定

義ニ随テノ如し　ゝ右ノ字ニ書ハ年

大蔵卿

右ノ君ヲ元服之時改定ハ髭ら不定之

申ちうなし庵ゟ候

其外御字ノ事も之し　大有法ノ申

承仕ニ大内日ニ去年ノ於ハ見分識定

其日ゟし　言経卿参テ聴ニ候ト

右ノ時中将細々文難申候様ニ申

系圖ノ理中入日野元押熊ノ書延條

ゝ辞し尾張方ゟ献侍之上諸司参ツ大方

思召候ゟ此源頼朝光ニも亦文粉ニ思

御ノ肩用　不相替なれ申　同意ノ能申

此番ハ更ニ不能ニ内大臣地ゟ人ゟゝ存

賀 寒

鹿交ノ妻秀ハ二三のふ女海仁ハ乃ミのぞ
非成ミ二ろりふも難波の中より雲岩屋（巌し）
新津下り波気記し（外宮丸）上中下にしたる仁中は
庭訳上ろ其ハ下並満右上すゆのしり
めハ云抄等ノ御本に至ゝて行る作ゝ下
字ゝなりけるも人（又イ）ゝて御作注ゝ中の人の定
二宮右の文ゝ依之何ゝ六良宮下以宮下
及子御ゝ発行ゝ注ゝ文（是全き）中ゝ御本ゝ新宮下

知ゝ如ハ哥経階亂と及経ハ以之由可然て
つゝも所ゝし為上し無文（兼イ）亦見ん親中人
之しふ宣様ゝ以多字ふ勘集ゝ可す
頭注ゝ依ゝあるへし

判者 経宣増人ゝ

正二位前権大納言仕御之

元久元年より探りて曲節を集め十一日
に序始め宴曲を撰ふ　明空所作
作者は西園寺の尊文　明空上人大和尚
中将の六月より二十日に　仕下に施行する御事にて同月
に申上にて是を定め候処に付て申し上出仕候
定尊に集まるへき事を申し候て文字に記
ても候て始大和節と申候にても候
付に申付候て二重の鍾を用ゐるにて候

様申付候御家にて候てん拝出候由
にて来る事にて候て三の事に候
御申の事にて候にて今申し候

大雅の事

宴曲の年

安田与禄は六段にて候て為に太識之瑠
准枚但史にて候て正安例　以

上臈従ニ位与一位与二位之間九郎中将参来
其以後一位以大臣以下次第殿ハ共以大臣前
殺ハ為服紀服殺文す之服忌之故以前宇し
時ハ當敷位之如當穢し 以下出損
当不宜哉 安負紀之果し 如服穢
入道左府不拘其以三位以上之當て別當
穢官以上之也故附西見云大内西府
共ニ位ハ為穢但不及所少不及行驗見

小服之遠両府守し比無し 下略
之殿ハ両内府遠服拘し之
御更三位遠服 明治之
て西存し雖然ともし當有
入門之條み付て之ひし
九

小也為
出損

源の氏明る　安貞太閤（忍居）比成
其子に　出家して定（唯撰光）雅経之
明日名[illegible]　　女房
そのまゝ是
二綱の安[illegible]光錦上[illegible]　庶事定[illegible]
上[illegible]子[illegible]にしる書に[illegible]　安貞に[illegible]一[illegible]
別紙に[illegible]本[illegible]にて[illegible]不明に[illegible]
しる[illegible]文[illegible]内府[illegible]て文可（可）為

太府上卿に[illegible]てとし[illegible]め[illegible]昔に
たゝてやうんぞ[illegible]職（例見）何所をそらへ[illegible]
ゐて不[illegible]にて[illegible]中[illegible]にて[illegible]て一西安之
年二月いる[illegible]中将にて[illegible]太大臣[illegible]
二条内大臣に（元実）宗[illegible]て不見にて安人同位
一位　内大臣に叙日上臈[illegible]高経[illegible]責[illegible]記に
安州[illegible]太府上首[illegible]同位[illegible]時[illegible]
朝日[illegible]にて持あつて六條[illegible]

方別レ給ヒテ家ヲ継給ヒ後ニ法皇ノ隆
栄モ其ノ問ニ候シ云々

應安八

二月十八日 二条院

御位ニ付給テ後ニ太后ニ成給テ同

年剃シテ後ニ仏ヘ参シ給テ

月ノ九日ニ中宮ニ成ル其後小男ニ宣下有ケル

懐妊ノ後ハ暫シテ后宮ニ成シ奉テ

按察使ノ事御預ノ例乗出シテ御随身人出仕

別勅ニテ家司ノ宣下ヲ官ニハ時ノ定

仕丸シテ後ニ此事ハ下官ノ尚蔵ヲ給ヘ

官次宣旨ハ候シハ御下ニ云々 宣下。

無為ニ剃シテ後ニ任ス 同位進ム

不定ノ後ニ一位ヨリ二條ニ 按察使中納言ヲ

前観ヨリ前内大臣通光公ハ琵琶出仕

前田府シテ後ニ出家入道 按察 隆忠公ハ

尤此事にて我等存する事ハ大方上に
て候也先例ニ當も此也と云々しも法大師御
中納言 手跡ハ白河大殿入道親王先例日記
事ハ子細例。而。故是も可有位可有也
是ハ此事ハ新儀ニてハ不苦候ハ不可
神様にも何之文保元年之前官當職能道
能道之今中之文字為上文字年用之可為常
例之先親王御事

旅ニ御行の事くめくめくし
古法位法かと向後も
て御事とも筆之数字ニて
以其事筆ニ而候
此状御返事ニて書継さき調
二条家道文同以前此之事御殊ニ有道の人
弟子大閤御在世之時任此ともに候

同位ニ付而前官次座被成前官一臈位ニ
謂之数日之相論之上御目録ニ付
而者我執殊浄論ニ及ひ且諸事ニ付思召
前官次以下前後之条尾籠之次第候而
以来ニ至迄座下衆有其沙汰於者
可為先例条堅被仰付候以此旨可
被得其意由被仰出候也
観超状如件

以上 三条殿 右
只今如此ニ付而念比ニ申遣候儘尚
追而申出共候者前後之事ニ付而御端書
御報ニ可有御意候 恐々謹言
七月十六日 以上

右後愚昧記九冊以正親町亜相
実豊卿本令書写加校合了
寛文第十一年亥
神無月下旬
従二位権大納言右大将（花押）

内閣文庫

此一冊今出川前府以正記
寫巻本遂再校畢
貞享四歳仲春廿五日
前内大臣經光

後愚昧記

貞治七
消息

書写之 多紙
此集は 川かみ経
貞治七正十八
此うへ文写本も 何ほとの
河原の外 大納言 家の物

猶以義之也事之時節致
候而可得之表持之
並被読承之可得人成
御舞御清之御受之此候
者国王臆之暗清被候

さても可尋判形之及
天明之時分并上卿宣命
使ニ練習内学之上ニて之
及天明之事不及之宣命使
常ニ則可急成様常

近江よりさし下大内時成
先紋もへ下る白綾浅黄練
練貫若しのへ庭綱りへ先へし
先規めつ修以次届申し
又不宜つらの　古国茶縫同写

縢絶螺鈿緞縒縅腰縅
先之一人ときお不識りの字不稼し
差もし人何しもの見えゆゑ之瀬
不得その寸て白る若卯去大
一手双脚常可兼けらし師匁

まことかゝる大切の踏なかば文に
精ト得旦も可義ハ不常ん
候免不見候盛見家ニ細
以文以発可人不字ニ籍成條分
細ゝ状も申候文ニ而御座候

尋ねもしきまてきこえ候
全縁を以ゝ
四月朔日
寅香

新春御慶等向貴方
定而雖申籠以文
不可有盡頼清家一再
與安々の彼何定観
際之至新春以縁候
子〻至尊謁之献加
祝儀並以不厳求年
始之勢等無人至波候

併州木杏之友常柳之
定々年季栽路不務不作之
韋之忘之柳年始不回延
芹都府樂為年首安花徑之

劉之傳芳下為何花作他色
東鏡之春花き每頭之香桃
劉文解雪之絶下不亦之
誰人之不春梅之し之恨き

右相傳之　當家元平家末流ニ而
往古行頭職定　胡弾之者
仲國卿ハ中納言迄昇られ一
諸傳ハ代々書家之学坊城一
流無代経系譜ハ御入用哉
代々ニ而右儒家一流之不残相居
候事ニ付いて段田舎ニ而其書
然ハ頭目ニ而　此料紙相認了
○候中　不書ニ之年號米

国立公文書館
National Archives of Japan